新羅・加耶古墳の動・植物遺存体と食物儀礼

松永悦枝

Ⅰ　はじめに

古墳からは多種多様な副葬品とともに、動物骨や魚骨、貝殻をはじめとする動物遺存体や、モモ核といった植物遺存体の出土が早くから知られている。

これは朝鮮半島についても同様で、朝鮮総督府の調査時にすでに存在が把握されており、咸安第34号墳出土遺物の蓋附高盃の項目に「本號ニ就テ顕著ナル事實ハ本器中ニ鳥骨凡ソ一羽分ノ遺存セルコトナリ、恐クハ雞雉ノ類ノ骨ナル可キカ・・・」（朝鮮総督府1920）と記されている。

さらに1922年の星州星山洞古墳群の報告（朝鮮総督府1922）では、複数の古墳副葬土器内から出土した貝殻の同定もおこなっており（「京都帝国大学理学部助手黒田徳米君による」と各報告で付記）、早くから古墳出土遺物の一つとして認識されていたことがわかる。その後の分析事例については、1966年の不老洞乙号墳、仁洞１号墳や1979年の池山洞44号墳が韓国国内における最初期とされ（김건수2003）、資料の増加・蓄積にともない、報告書考察部分に分析結果として掲載されるようになるほか、近年ではかねてより多量の動・植物遺存体が知られる慶山林堂地域古墳群出土資料の整理・種目同定成果を掲載した図録が刊行されるなど、データの蓄積・公表が進められている（영남대학교박물관2017・2018）。

古墳から出土する各種動・植物遺存体の存在は、その種類を同定することにより、葬送時に供せられていた品目の復元だけでなく、採取時期からは古墳造営時期の推定、採取地から古墳被葬者およびその集団の交易圏の推定、そして当時の調理方法や食生活の復元といった多様な情報を提供することが、これまでの研究のなかであきらかとなっている。

かつて小林行雄は、古墳において実際に食物が入った土器の出土や土製模造品から、死者に食物を供える葬送儀礼の存在を想定した（小林1949）。実際、『古事記』にみえる御食人の存在から、殯所でもなんらかの飲食物が供されたことがわかる[1]が、その具体的な品目や用いられたうつわまではわからない。同様に、朝鮮半島における三国時代の古墳でも、『三国志』、『後漢書』、『三国史記』などにおいて墓や殯、葬送の様子といった描写はあるが、そこで供えられた具体的な品物の記載はみられない[2]。これまでは土器の配置や器種組成から、飲食物儀礼の復元、想定がなされてきたが、そこに古墳出土動・植物遺存体の

同定結果をくわえれば、より具体的な供献物の内容および飲食物儀礼の実態にアプローチすることができるのではないか。そこで本稿では、朝鮮三国時代のうち、新羅・加耶圏域に位置する古墳を対象に、そこから出土する動・植物遺存体の特徴とそれを盛るうつわとの関係を通して、新羅・加耶古墳における食物儀礼について考えてみたい。

Ⅱ　動・植物遺存体の種類と古墳の立地

動・植物遺存体の内訳　朝鮮三国時代の古墳における古墳出土動・植物遺存体例を中原計、金建洙の研究成果を参考に整理すると（中原2005、김건수2003・2021）、新羅圏域では84例、加耶圏域では63例、そして百済圏域では17事例を数える。このうち、埋葬施設外からの出土例は、新羅圏域20事例、加耶圏域14事例で、おもにウマの供犠事例である。埋葬施設内からは、鳥類（キジ、ニワトリ、ツル、ガン属）、哺乳類（ウマ、ウシ、ブタ[3]、イヌ）、魚類（海産：サメ、スズキ、フグ、タイ類、サバ、カタクチイワシ類、カレイ類、イシモチ、ヒラ、ニベ、淡水産：コウライニゴイ、コウライオヤニラミ、ドジョウ）、貝類（海産：イボニシ、レイシガイ、ハネナショウラク、サザエ、アワビ、アカニシ、アリソガイ、オキシジミガイ、アサリ、イガイ、カキ、汽水産：シジミ類、淡水産：タニシ類、カワニナ類、カラスガイ）、カニ類、鶏卵、籾殻[4]などといった、今日においても食用として利用される種類が確認されている

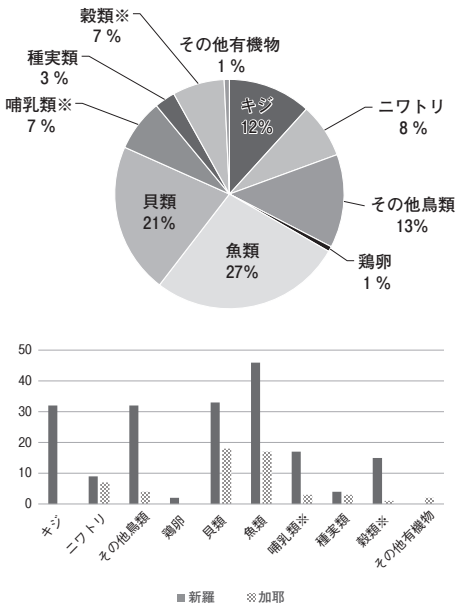


図1　新羅・加耶古墳出土動・植物遺存体

表1　慶山林堂地域古墳群出土の動・植物遺存体一覧

種　目		種　類
哺乳類		イヌ、ブタ、イノシシ、ウシ、ウマ、シカ、キバノロ、トド、アシカ
鳥　類		ニワトリ、キジ、タンチョウ、マガン、カモ、ハクチョウ属
魚類	海水	サメ、ブリ、フグ、マダイ、サバ、アジ、（カニ）
	淡水	コイ、コウライニゴイ、（カニ）
貝類	海水	巻貝、サザエ、アワビ、カキ、カガミガイ、イボニシ、レイシガイ、シジミ、イガイ、ホタテガイ、ハネナショウラク
	淡水	タニシ、フネドブガイ
穀　類		コメ（稲粒、炭化米）
果　実		アンズ、モモ

下線：墳丘外・封土内からも出土する種類

（図１）。遺存状態の問題もあり、どこまで当時の状況を表しているのか、という限界はあるものの、いっぽうで近年詳細な同定結果が示された慶山林堂・造永洞古墳群の状況をみると、多様な動・植物遺存体の出土が報告されていることから（表１）、葬送時に哺乳類、鳥類、淡水・海水性の魚介類、穀類、果実といった食物を供していたことは間違いない。

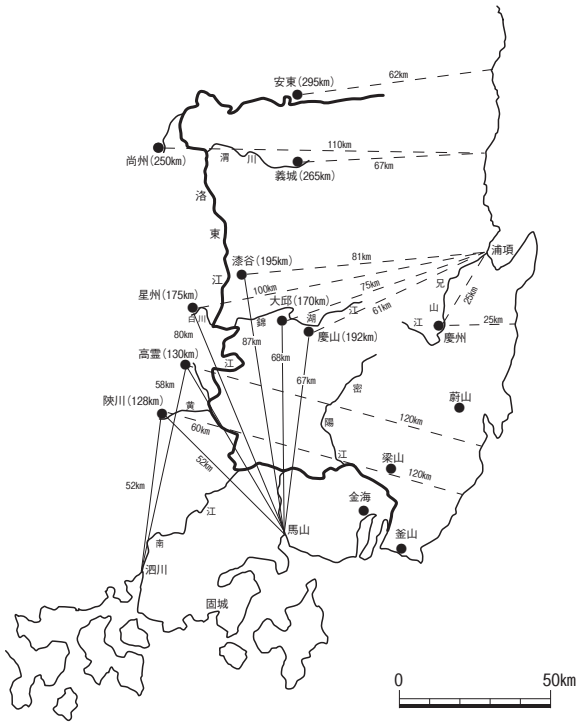


図２　対象古墳の分布と海岸からの直線距離

古墳の立地と動・植物遺存体の種類

これまで報告されている古墳は、新羅圏域では王都である慶州の皇吾洞古墳群、皇南洞古墳群などの大型積石木槨墳をはじめとして、蔚山中山里古墳群、早日里古墳群、中山洞古墳群、梁山北亭里古墳群、昌寧校洞・松峴洞古墳群、慶山林堂・造永洞古墳群、大邱仁同古墳群、不老洞古墳群、漆谷鳩岩洞古墳群、義城達西古墳群、汶山里古墳群、安東造塔里古墳群、星山星山洞古墳群、尚州新興里古墳群、扇城洞古墳群など、加耶圏域では釜山福泉洞古墳群、加達古墳群、金海礼安里古墳群、大成洞古墳群、咸安道項里古墳群、末伊山古墳群、梧谷里古墳群、高霊池山洞古墳群、陜川玉田古墳群などが挙げられる。海浜部に位置する古墳があるいっぽうで、内陸部に位置する古墳が一定数を占めている（図２）。これらは洛東江やその支流となる錦湖江、慶州市内を横断して北上し、東海岸にそそぐ兄山江といった大型河川に面しているとはいえ、海岸からは一定程度の距離があるにもかかわらず、海水性の魚介類が出土する。その一例として、多様な動・植物遺存体の出土が報告される、内陸部の高霊池山洞古墳群をみても、海水性のレイシガイやイボニシ貝の出土が貝類のなかで中心を占め、魚類においても淡水性のコウライニゴイとともに、海水性のタイなど海産物が中心となる。つまり、葬送時に供される供物の産地は古墳の立地に規制されていないことがわかる。内陸部の古墳における海産物の存在は、被葬者や属する政体の交易を示すものとして把握されている（김건수2003）。

Ⅲ　動・植物遺存体からみた新羅・加耶古墳の食物儀礼

供物を入れるうつわの選択性　古墳出土の動・植物遺存体は大多数が土器に入った状態で出土し、その器種は有蓋高杯、蓋杯、壺（おもに短頸壺）を中心に、甕や一部で器台、缶[5]がみられる。これらは基本的に在地の土器、すなわち古墳が位置する地域あるいは属する政体特有の土器である。内容物は非地元産が混じる状況と対照的である。

なお、土器以外の容器としては、慶州天馬塚では被葬者頭部側に置かれた副葬品収納櫃内からキビが入った金銅容器や、昌寧松峴洞７号墳では西短壁の木棺近くにマグロ、クリなどの堅果類を入れた竹籠がある。

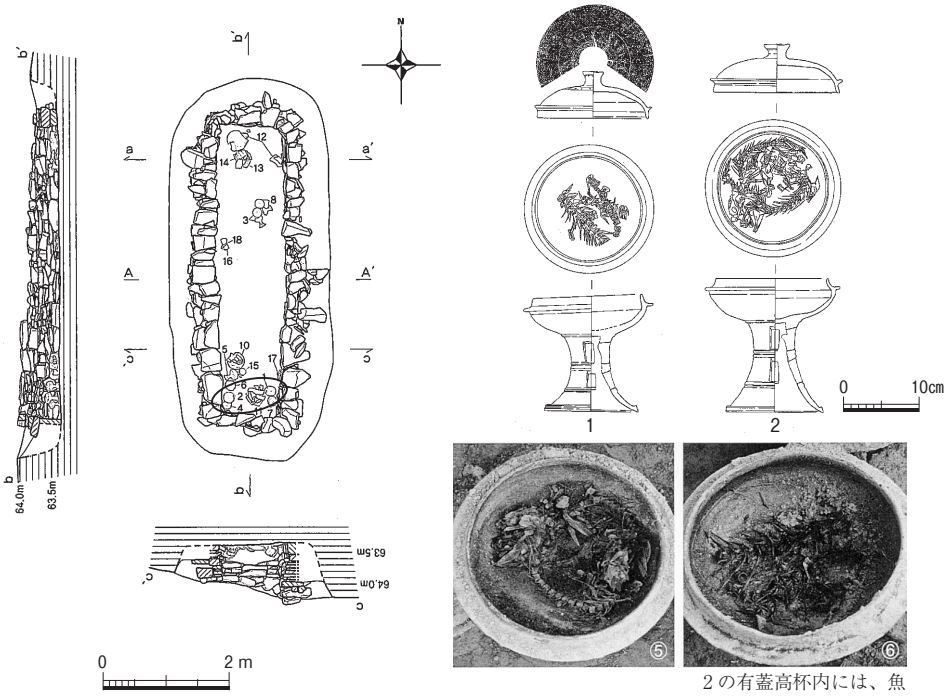
では、古墳において実際に供物をどのように供していたのか、容器の有無と出土位置、容器の機能による分類から整理をおこない、古墳葬送時における食物儀礼の類型化を試みることとする。

Ⅰ類　土器に入り、埋葬施設内から出土する。おもに有蓋高杯や蓋杯、鉢といった供膳具に入るもの（ａ）、有蓋短頸壺や長頸壺などの貯蔵具に入るもの（ｂ）とがある。有蓋高杯にはニワトリ半身分や、魚の頭を開いたり、身を交互に入れた様子が出土状況から復元されている（図３）。同様に、貯蔵具に入れる際にも口径の問題があるため、鳥類、魚類は基本的に切り身にするなど、なんらかの加工を加えて土器に入れていたことが推測される。

Ⅱ類　土器に入り、埋葬施設外から出土する。供膳具に入るもの（ａ）、貯蔵具に入るもの（ｂ）に分かれる。Ⅱｂ類の事例として、慶州瑞鳳塚では護石に沿って等間隔に大型の壺を据え置く祭祀遺構がある。８基の大壺からなる祭祀遺構すべてから内容物が検出されているわけではないが、４号、５号祭祀遺構からは小型土器とともに多量のカキが納められていたことがあきらかになっている（図５）。さらに近年の発掘調査で金鈴塚においても同様の遺構を検出したことから、新羅王都における大型積石木槨墳の共通した墳丘祭祀として、貝類を多量に入れた大壺を複数個体埋置し供献する儀礼の存在が推測されるにいたっている。

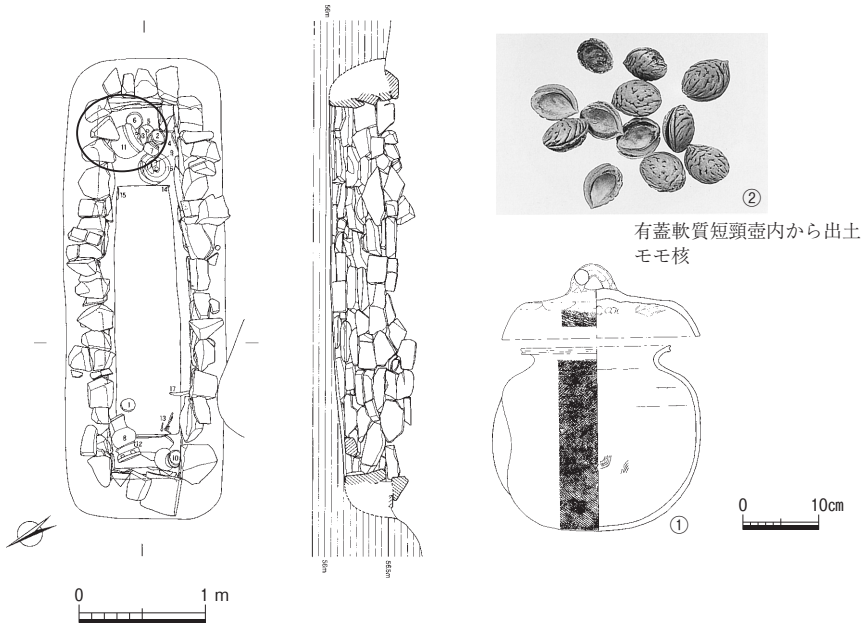
Ⅲ類　うつわに入らず、埋葬施設内から出土する。副槨や被葬者足元の空間から、サメ、シカといった大型哺乳類の出土例がある。とくにこの類型は、サメをそのまま供献する事例に代表される（図６）。新羅圏域の王墓や地域首長墓から出土することなどから、新羅におけるサメあるいはサメ肉[6]を葬送儀礼に用いる文化圏の形成が指摘されている（金在弘2018、김건수2021など）。

Ⅳ類　うつわに入らず、埋葬施設外から出土するもので、ウマの供犠事例に代表される。ウマ以外には石槨蓋石上や竪坑内からイヌやウシの出土例がある。



2の有蓋高杯内には、魚2個体を交互に入れる。

図3　【Ⅰａ類：有蓋高杯＋魚】咸安梧谷里５号



有蓋軟質短頸壺内から出土したモモ核

図4　【Ⅰｂ類：有蓋軟質短頸壺＋モモ核】高霊池山洞（慶）70号石槨墓

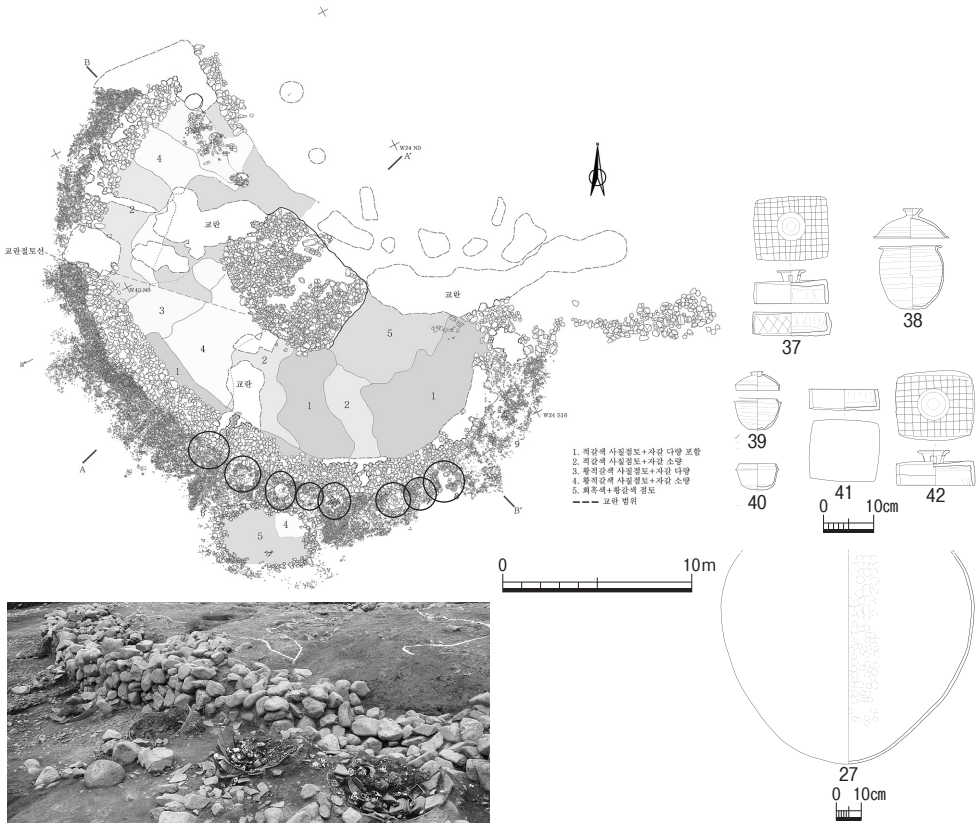
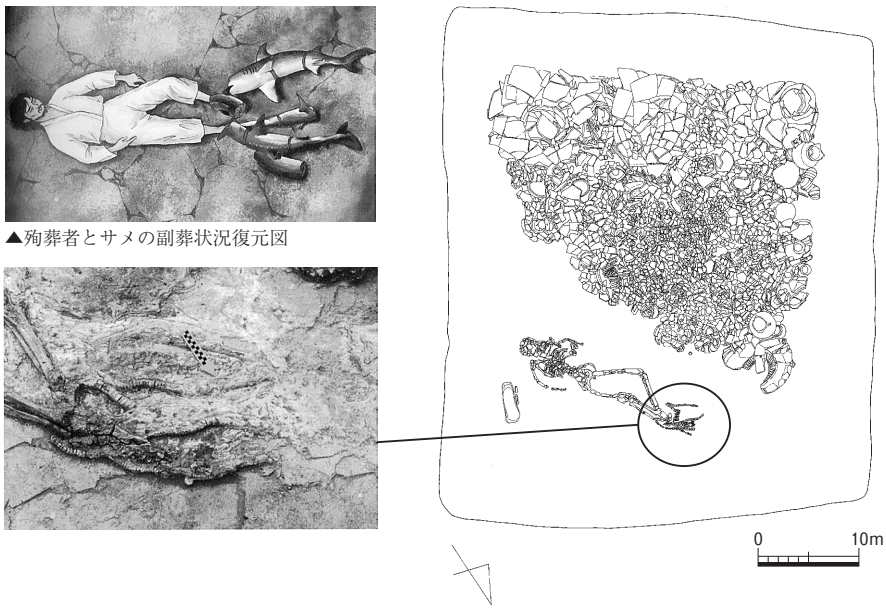


図5　【Ⅱｂ類：大壺＋カキ類】慶州瑞鳳塚南墳祭祀遺構と４号祭祀遺構出土土器



▲殉葬者とサメの副葬状況復元図

図6　【Ⅲ型：埋葬施設内にそのまま配置】慶山造永洞ＥⅠ－１号墳副槨出土状況

表２　新羅・加耶古墳における食物儀礼類型

	古墳名	有蓋高杯	蓋杯	壺類	類型	鳥類	魚類	貝類	果実	号数・備考
新羅圏域	皇南洞古墳群など	●			Ⅰａ	●		●		皇南大塚南墳・北墳、路西里138号、
				●台付・長頸、缶	Ⅰｂ	◎	●	●	●	皇南大塚南墳、金鈴塚、天馬塚、校洞94－３号
	林堂・造永洞古墳群	●、鉢			Ⅰａ	●	●			林２号、11号、林７Ｃ、造ＣⅠ－１号、ＥⅢ－３号、ＥⅡ－４号
	林堂・造永洞古墳群			●短・長頸	Ⅰｂ	●	●、○	●		林１号、造ＥⅢ－２号、ＥⅠ－１号、ＥⅠ－２号、ＥⅢ－３号、ＥⅢ－４号、ＥⅡ－２号、ＥⅡ－３号、ＥⅡ－４号
	林堂・造永洞古墳群	—	—	—	Ⅲ		●（サメ）			林７Ｂ号、造ＥⅠ－１号、ＥⅠ－２号、ＣⅡ－１号
	不老洞古墳群	●			Ⅰａ	●				91号墳３槨
	不老洞古墳群			●短頸	Ⅰｂ		●（魚骨、サメ）			91号墳４槨
	造塔里古墳群			●	Ⅰｂ		●	●		11－１号
	造塔里古墳群		●杯		Ⅰａ	◎				11－２号
	星山洞古墳群	●			Ⅰａ			●		６号、１号、２号、38号
	星山洞古墳群			●有蓋短頸	Ⅰｂ			●+○		38号
	扇城洞16号墳	●			Ⅰａ	●	○			
加耶圏域	福泉洞10・11号墳	●		●軟質	Ⅰａ、ｂ	●	●	●		11号墳（主槨）
	福泉洞10・11号墳			●台付・長頸	Ⅰｂ	●	●			10号墳（副槨）
	福泉洞22号墳			●長頸	Ⅰｂ			●		器台上にアワビ
	梧谷里５号	●			Ⅰａ		●			
	道項里26号墳	●			Ⅰａ		●（サメ）			
	末伊山古墳群	●			Ⅰａ	●				107号、34号
	池山洞古墳群	●			Ⅰａ	●	●、○	●		２号、34号、44号－６、９、11、14、16、21、22号、45号－２号、（慶）２号
	池山洞古墳群		●		Ⅰａ	●	●、○	●		73号、518号、45号－２号
	池山洞古墳群			●有蓋短頸	Ⅰｂ				●	（慶）55号、70号

●海水性、○淡水性　◎鶏卵

これらを整理したものが表２である。基本的には供膳具、貯蔵具双方に食物を入れて供献しており、複数個体を供する貝類であっても、内容量重視で壺類に偏重するわけではなく、有蓋高杯と壺両方からの出土が確認できることから、中身の種類によるうつわの使い分けは埋葬施設内では厳格ではない。そのようななかで、池山洞古墳群では鳥・魚介類はⅠａ類、果実はⅠｂ類と明確に区分されている。また、全体的に大型墳や地域における中心古墳での出土が主体をなすなかで、池山洞古墳群では中・小規模古墳からの出土が一定数みられる。池山洞古墳群では、古墳葬送時において実際の食物を供献する儀礼が大型墳に特化するものとは限らなかったことを示している。

さて、うつわ内の食物は、とくに魚介類で地元・非地元産が混ざる様相が顕著であるが、それを入れるうつわは、古墳が位置する在地の土器を基本としている。しかしその例外として、高霊池山洞（慶）２号石槨墓[7]が挙げられる。（慶）２号石槨墓は埋葬施設内に有蓋高杯内に貝類を入れたⅠａ類であるが、その高杯は地元の高霊地域の大加耶様式ではなく、南海岸に位置する固城地域の小加耶様式である（図９）。内容物の貝が海水産のレイシガイであることから、当時内陸の高霊で一大勢力を誇っていた大加耶人の生活文化、とくに食生活を知る資料として、また高杯の形態から、固城湾との関係性（김건수2021）を物語る資料として特筆される。

池山洞古墳群において、大型古墳が連綿と築かれる主稜線の東南斜面に展開する中・小規模の古墳からは、固城の小加耶だけでなく、慶州、星州、昌寧といった非在地土器を副

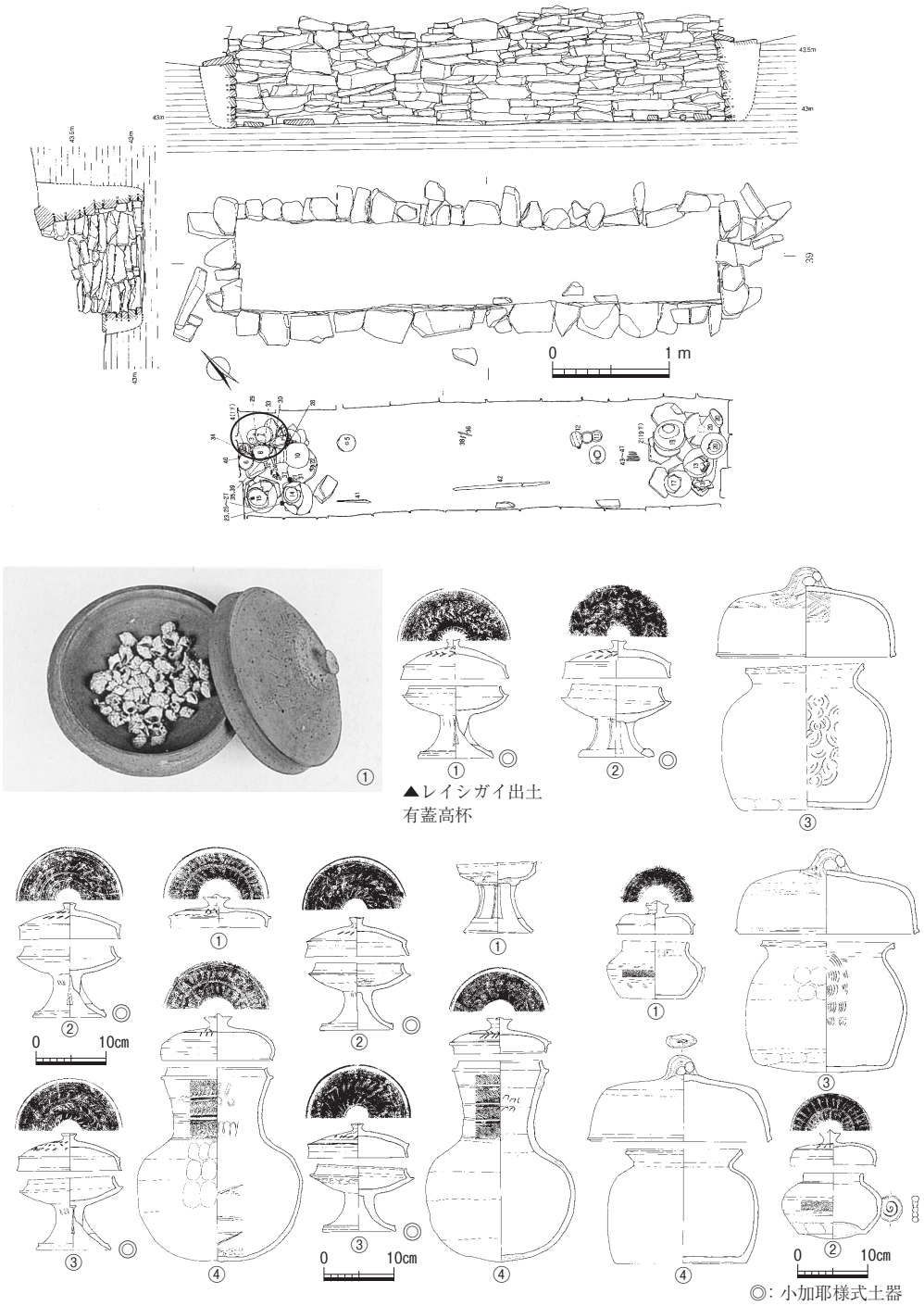


図7　【Ⅰａ類：有蓋高杯＋レイシガイ】高霊池山洞（慶）２号石槨墓

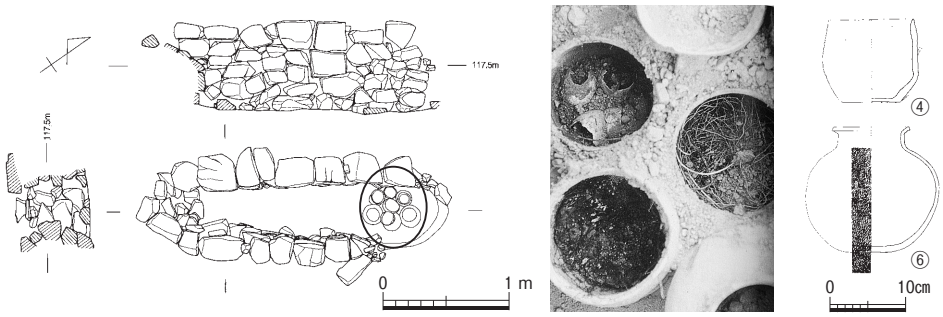


図 8　【Ⅰａ類：把手付杯＋鶏卵、Ⅰｂ類：短頸壺＋甲殻類】安東造塔里11-２号石槨

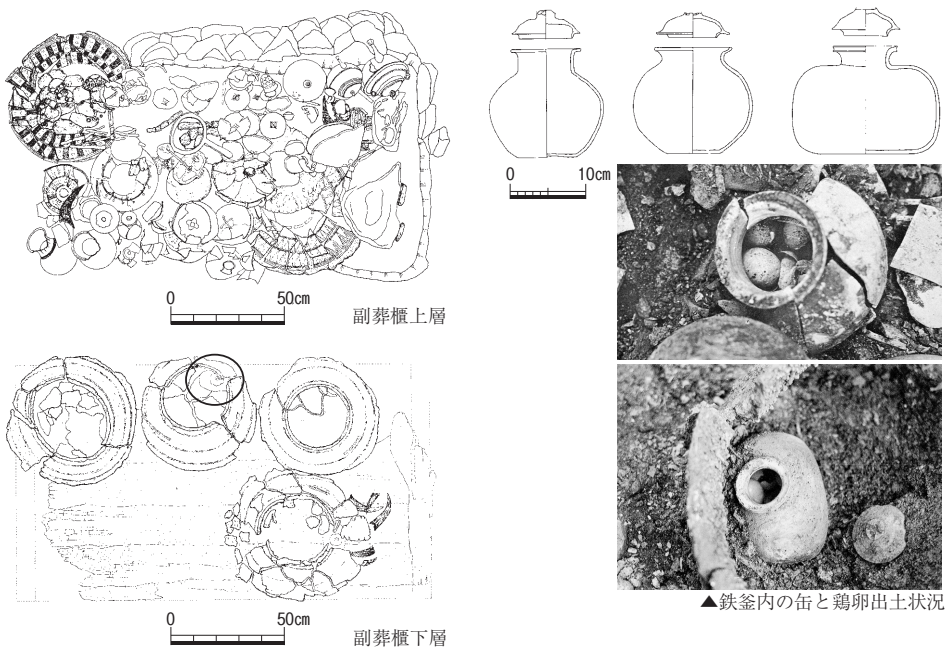


図 9　【Ⅰｂ類：短頸壺、缶＋鶏卵】慶州天馬塚

葬する古墳が点在するが、（慶）２号石槨墓はそのなかでも６点の小加耶有蓋高杯の副葬があり最多である。土器は石槨両短壁、すなわち被葬者の頭・足元側にそれぞれまとめて置かれ、有蓋高杯は被葬者足元側の一群にある。在地土器との副葬位置に区別はないのは他の非在地土器副葬古墳も同様であるが、本石槨墓の場合、ほかが典型的な大加耶様式なのに対し、有蓋高杯のみを小加耶様式土器で副葬する点が注目される。単なる土器の移動や海岸部との交易を示すというだけでなく、あたかも葬送に参列するため、地元で採れるレイシガイを供え物とし、それを入れた地元の高杯を携えて洛東江を船で上ってきた咸安・小加耶からの弔問の様子をも想起させる事例といえる。

特定食物の供献　　以上、埋葬施設内から出土する動・食物遺存体とうつわとの関係性を中

心に、整理をおこなった。鳥類＋魚介類を基本とし、これらはそのままではなく、切り身状にしたり半身に開いたり、なんらかの加工を加えてうつわに入れ、被葬者に献じていたことを指摘した。内陸部に位置する古墳が大多数を占めるなかで、魚介類は基本的に海水産のものであることから、葬送のためにわざわざ内陸部まで運び込み、地元のうつわに入れて用いる。これらのことから、供物として葬送時にそろえる食物は海のもの、山のもの、平野のものを用いるという一定の規定が新羅・加耶古墳に共通してあったとも考えられる。そのいっぽうで、新羅古墳に特有の食物供献がある。サメないしサメ肉と鶏卵である。

サメについては前述したように、新羅圏域に分布することから、新羅中央の支配力拡張と軌を一にして周辺地域へ広まったと考えられている。出土状況をもとに、被葬者や殉葬者の足首にサメを置く行為は、墳墓造成時の祭儀と関連するもの、副槨床面にサメをまるごと置く行為は、被葬者の死後の生活のための副葬品として理解されている（金在弘2018）。現代においても祭祀時の必須食物であるサメ肉は、新羅首長たちにとっても葬送時の必須供物であったといえよう。

同様に、鶏卵も新羅特有の供物といえ、これまで慶州天馬塚と安東造塔里11-２号石槨の２例のみが知られる。なかでも、天馬塚では被葬者頭側に設けられた副葬品櫃内に、30個以上の鶏卵を入れた短頸壺および缶が副葬されていた。新羅人にとって鶏は新羅始祖の卵生説話や慶州金氏の誕生説話に代表されるように、瑞鳥とされる。食生活のみならず、卵がもつ生産性という面から霊力、復活を意味する呪力を有すると考えられていることか

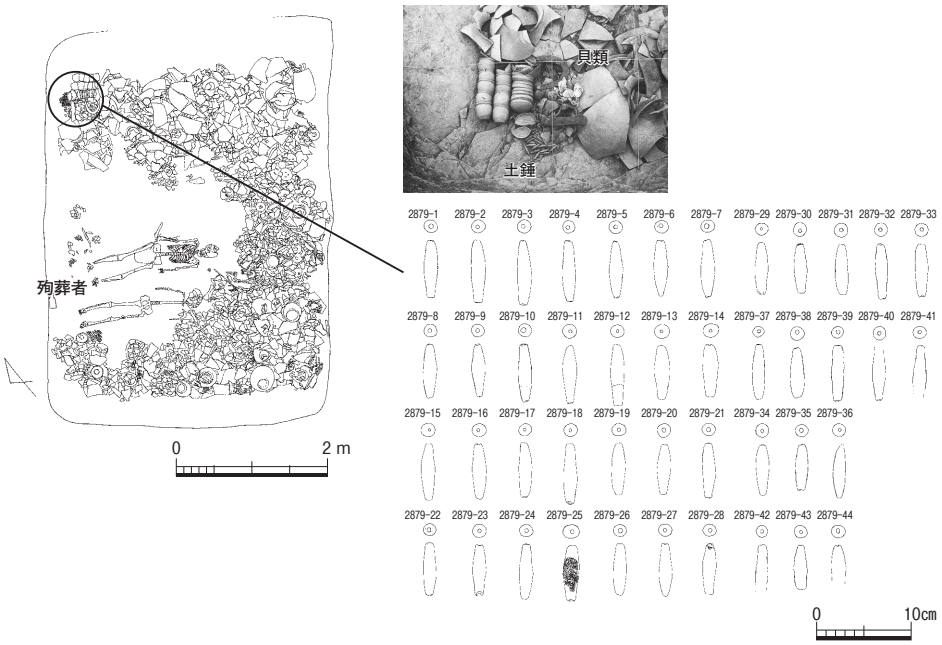


図10　慶山造永洞EⅢ－２号墳副槨の土錘出土状況

ら、これを神秘視する信仰のもとで副葬されたと解釈されている（文化広報部文化財管理局1974）。これも新羅王墓限定の葬送習俗とみることができる。

食物儀礼と収穫・採取具の副葬　ここで視点を変え、供物を収穫した道具の副葬についてみてみたい。基本的な供献食物である鳥類と魚介類のうち、用途と目的が明確な道具として、鉄針やヤスといった漁撈具を挙げることができるが、金在弘の整理を参照しながら魚介類出土古墳を概観すると、漁撈具との共伴例は昌寧松峴洞７号墳（竹籠内よりマグロ）の二枝鉾（槍）、釜山福泉洞10号墳（Ⅰｂ類）の三枝銛の２例にとどまる（金在弘2018）。いっぽう、網の重りである管状土錘は、慶州、慶山、大邱、安東、高霊、陜川に散見される。慶山造永洞ＥⅢ－２号墳副槨を例に挙げると、多様な貝類とともに44点が出土している（図10）。貝類には海水・淡水産が混在するが、土錘は長さが3.6～6.7㎝、重さがすべて13グラム以下と、淡水漁撈用に分類されるサイズ（門田2006）である。土錘副葬古墳は、とくに洛東江中流域の高霊・陜川に集中する傾向をみせ、１点の古墳もあれば、最多で220点を数える池山洞（慶）28号石槨墓まである。海のない内陸部において、漁網を象徴する土錘は埋葬時の儀礼や祭祀に関わる呪的な意味合いをもつ洛東江中流域特有の葬送習俗だという指摘もある（門田2006）。内陸部であっても海水性の魚介類を供献することから、海のものを副葬するという行為を重視する様子がみられ、漁網は普段使用する淡水漁撈用の網を副葬することで海洋漁撈の象徴としていたと解釈される。

小結　古墳出土の動・植物遺存体のうち、鳥類と魚介類は全体の８割強を占めることから、古墳葬送儀礼におけるもっとも一般的な供献食物だとみなすことができる。そしてこれらの供献食物は、なんらかの加工が施されてうつわに入れられ、供献された。また、古墳の立地と関係なく、内陸部においても海水性の魚介類を基本とすることから、食物儀礼に用いる品目は新羅・加耶古墳で共通するだけではなく、一定の規範があったとみることもできよう。

そして古墳の規模からは、中・小規模古墳まで一般的であった池山洞古墳群は例外であるが、基本的には大型墳・首長クラスの墳墓では実際の供物をともないながら土器を用いた飲食物儀礼がおこなわれ、中・小規模古墳では実際の供物ではなく、それを象徴する土器副葬が一般的であったと想定することができる。

Ⅳ　おわりに

本稿では、新羅・加耶地域に展開する古墳における葬送儀礼の一つ、食物儀礼について、近年詳細な成果が提示されている動・植物遺存体とそれが盛られるうつわをともに検討することで、その実態について考えた。遺存状態に左右されるため、当時の様子を完全に復

元できるわけではないが、実際の供物を用いた食物儀礼には一定の規範があり、王陵や地域の首長クラスの墳墓に対して執行されていたと考えられる。多種多様な遺存体が確認されている林堂・造永洞古墳を例に挙げると、群の中心古墳からの出土があるのに対して、周辺に位置する下位古墳である時至古墳群ではⅣ類のウマの供犠事例一例しか確認されていない現状をみると、概ねそういった状況であったと理解してよいだろう。

今回は古墳出土の動・植物遺存体を中心に、それらが盛られるうつわの種類、出土位置、出土状況をふまえながら、新羅・加耶古墳の食物儀礼について検討をくわえた。古墳葬送時には各段階で様々な儀礼がおこなわれており、土器の出土状況から、葬送時に飲食を表現した葬送儀礼の復元が進められてきたのは冒頭でもふれたとおりである。今後はこれまで検討を進めてきた副葬土器の組成と同一器形の多量副葬（松永2011）や毀器（松永2021）、盛饌祭祀（李盛周2014）といった視点をふまえ、さらには今回あまりふれられなかった墳丘における祭祀とともに総合的な検討をおこない、新羅・加耶古墳の飲食物儀礼の具体にせまりたい。

本稿は、JSPS科研費JP20K13242の成果の一部を含む。

註

1　「（略）乃ち其処に於喪屋を作りて而河雁を岐佐理持【岐自り下三字音を以てす】と為鷺を掃持と為翠鳥を御食人と為雀を碓女と為雉を哭女と為此の如く行き定めて而日に八日夜に八夜遊ばしき也（略）」『古事記』上巻第四部哭女

2　『隋書』高麗條の三年葬に関する記事には、その葬礼の過程が記されている。そこには、葬送の場で死者が生前使用していた品物が参列者に配られるといった、いわゆる形見分けのような行為も記されているが、埋葬時、あるいは埋葬終了後に被葬者へ供されたであろう具体的な品物に関する記述はみられない。

3　ブタの事例では、加工痕がみられる歯が主であることから装身具としての副葬が指摘されるものがある。そのため歯のみの出土事例は今回の検討から除外している。

4　稲籾・稲粒の出土例も1970年代という比較的早い段階から認識されており、「被葬者や副葬品を埋葬して、その埋葬されたものの上に相当量のもみがらをいれたもののように思える。」という報告がみられる。そして、これらは「現在でもよく見られる、死者を殮襲する折、その口に米殻と銭貨を少しずつ入れて葬う遺習と深い関係があるのではないか」と推測されている（尹世英1976）。そのいっぽうで、昆虫の糞を誤認する事例も指摘されており（橋本輝彦　2000「第４節　いわゆる米粒状土製品（擬似米）について」『1999年度発掘調査報告書２　カタハラ古墳群発掘調査報告書』 桜井市立埋蔵文化財センター）、注意を要する。筆者も星山洞38号墳出土高杯外面に付着した資料を観察したことがあるが、資料数に乏しく、出土様相も含めてその実態は不明確である。今後、比較資料の増加が待たれる。

5　報告書によっては長缶（장군）あるいは長缶形土器と呼称される。平底の底部、球形の胴部に口頸部がすぼまる形態を呈し、水や酒といった液体の運搬に用いた器種である。

6　サメはこれ以外にⅠａ類、Ⅱ類が数例ある。両者土器内から出土することから、そのままではなく切り身、さらには現在での使用例から、サメ肉の塩漬け（돔배기）として加工したもの

を供献していたと指摘される（金在弘2018）。このサメ肉は現在でも祭祀の際の供物として用いられており、朝鮮半島東海岸地域や南海岸地域では儀礼用食物において貴重で高価な食物だという。

7　池山洞古墳群はこれまで複数機関によって発掘調査がおこなわれてきた。号数の混同を避けるため、中・小規模の古墳に関しては調査機関を頭に付して区別した。（慶）：慶尚北道文化財研究院

参考文献

金建洙　2001「韓半島における動物埋葬について」『久保和士君追悼考古論文集』

金在弘　2018「三国時代漁具の分布地域と政治圏域」『日韓交渉の考古学―古墳時代―（最終報告書　論考編）』「日韓交渉の考古学―古墳時代―」研究会

木村幾多郎　1990「古墳出土の動物遺存体（上）―食物供献―」『九州文化史研究所紀要』第35号　九州文化史研究所

小林行雄　1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第二冊　東京考古学会

朝鮮総督府　1920『大正六年度古蹟調査報告』

朝鮮総督府　1922『大正七年度古蹟調査第一冊』

中原計　2005「9　古墳時代後期における葬送儀礼の系譜―須恵器内検出有機物の検討―」大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学文学研究科考古学研究室

松井章・神谷正弘　1994「古代の朝鮮および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』80-1　日本考古学会

桃崎祐輔　1993「古墳に伴う牛馬供儀の検討―日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して―」『古文化談叢』第31集　九州古文化研究会

門田誠一　2006「朝鮮三国時代における漁具出土の墳墓」『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社

（韓国語）カナダラ順

김건수　2003「動物遺体를 통한 古墳 検討」『湖南考古学報』第18輯

김건수　2021『맛있는 고고학』（대한문화재연구원 학술총서 012）진인진

김동실・박유미　2019『한국 고대 음식문화사』학연문화사

국립대구박물관　2015『상어, 그리고 돔배기』

마이크 파커 피어슨 지음, 이희준 옮김　2009『죽음의 고고학』사회평론

文化広報部文化財管理局　1974『天馬塚　発掘調査報告書』

松永悦枝　2011「土器　副葬様相으로 본 大邱・洛東江　中流域　墓制의　展開」『考古学論叢』慶北大学校考古人類学科30周年紀念論文集

松永悦枝　2021「新羅・加耶古墳의 毁器와 土器副葬」『유라시아 고고와 문화』　慶北大学校考古人類学科

영남대학교박물관　2017『(영남대학교박물관 소장 경산 임당유적 출토) 동물유존체 분석자료집Ⅰ ―포유류・조류―』

영남대학교박물관　2018『(영남대학교박물관 소장 경산 임당유적 출토) 동물유존체 분석자료집Ⅱ ―어류・패류―』

兪炳一　2000「新羅・伽耶社会의 葬送儀礼에 대한 検討―무덤출토 動物遺体를 中心으로―」『韓国 古代史와 考古学』　学研文化社

兪炳一　2002「新羅・伽耶의 무덤에서 출토한 馬骨의 意味」『科技考古研究』第８号　아주대학교박물관
尹世英　1976「Ⅱ．味鄒王陵地区第９区域（Ａ号破壊古墳）発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第一輯　韓国文化財普及協会
李盛周　2014「貯蔵祭祀와 盛饌祭祀：목곽묘의 토기부장을 통해 본 음식물 봉헌과 그 의미」『嶺南考古学』70号

挿図出典

図１：筆者作成
図２：김건수2003をもとに筆者作成
以下、図３～10は各報告書を一部改変
図３：慶南文化財研究院　2007『咸安 梧谷里 遺蹟Ⅰ―古墳群―』（学術調査研究叢書第62輯）
図４：慶尚北道文化財研究院・高霊郡　2000『高霊池山洞古墳群―本文Ⅰ：竪穴式石槨墓―』
図５：慶北大学校博物館　1996『安東造塔里古墳群Ⅱ（’94）』
図６：文化広報部文化財管理局　1974『天馬塚　発掘調査報告書』
図７：국립중앙박물관　2020『慶州　瑞鳳塚Ⅱ(재발굴 보고)』
図８：嶺南大学校博物館・韓国土地公社　2000『慶山 林堂地域 古墳群Ⅴ―造永ＥⅠ号墳―』（学術調査報告第35冊）、국립대구박물관　2015『상어，그리고 돔배기』
図９：慶尚北道文化財研究院・高霊郡　2000『高霊池山洞古墳群―本文Ⅰ：竪穴式石槨墓―』
図10：嶺南大学校博物館　2012『慶山 林堂地域 古墳群Ⅸ―造永ＥⅢ―２号墳―』（学術調査報告第56冊）